

8. アーバニズムの下位文化理論

1970年代にフィッシャーは、ワースのアーバニズム理論に代わる、アーバニズムの下位文化理論を提案した。この理論は、人口の集中が、ネットワークの選択的形成を可能にするために、都市では多様なネットワークが形成され、それを基盤とする多様な下位文化が生まれるというもの。

(1) アーバニズムの理論 (Fischer 1984 の整理)

●都市はわれわれの生活をどのように変えるのか？

①生態学的決定理論

都市がコミュニティを衰退させ、人びとの生活を孤立と疎外へみちびく (Wirth 1938)。

②社会構成理論

都市住民の生活様式を規定しているのは、都市そのものではなく、都市の社会構成。都市住民の社会的属性 (社会的地位) が、生活様式を規定している (Gans 1962a)。

③下位文化理論

社会構成だけではなく、都市そのものも、都市住民の生活様式を規定している。ただし、都市はコミュニティを衰退させるのではなく、新しい下位文化を育てる (Fischer 1975)。

(2) 下位文化理論の定式化

フィッシャー「アーバニズムの下位文化理論をめざして」 (Fischer 1975)

●都市の定義：人口の集中している場所

●下位文化の定義：外社会から相対的に区別された社会的ネットワークとそれに結びついた特徴的な価値、規範、習慣。

命題1 地域が都市的であればあるほど、下位文化の多様性は増大する。

理由①規模→構造的分化 (選択的接触) →新しい社会的ネットワークの形成。

②都市の拡大→人口の流入→都市内部の人口の多様性。

命題2 地域が都市的であればあるほど、下位文化の強度は増大する。

理由①臨界量の達成→制度の完備→下位文化の強化

②文化的衝突→下位文化の強化

命題3 地域が都市的であればあるほど、伝播 (普及) の源泉が増加し、下位文化への伝播が増大する。

理由：下位文化相互の接触による伝播。

「下位文化の強化という都市的過程は、文化の伝播というもうひとつの過程に抗して作用する」(Ibid. p.1327 = 訳 p.65)。

命題4 地域が都市的であればあるほど、非通念性の率が增大する。

理由①下位文化の多様性(命題1)→非通念的行動が増加する。

②下位文化の強化(命題2)→非通念的行動が増加する。

③下位文化の伝播(命題3)→非通念的行動が増加する(文化の組み替え)。

下位文化の強化と伝播の対抗作用について

命題5(a) 所与の下位文化にとって、アーバニズムが引き起こす伝播の結果は、中心的な項目よりもむしろ周辺的で重要でない項目に現れる。

例：自転車と信念、服装の好みと世界観

命題5(b) 長期にわたってアーバニズムが増大するとき、外部要素の伝播は下位文化の強化の過程に遅れて進行する。

命題6 都市の非通念性は、普遍的な方向性をとることはない。

「ワース理論とは違って、都市がなぜ合理主義や世俗主義や普遍主義のような方向に逸脱しなければならないかについて、ア・プリオリな理由は存在しない。必要なのは、都市は典型的な標準とは異なるということだけである」(Ibid., p.1335)。

命題7 都市の人びとと村落の人びととの間には、依然として文化的な違いがある。

「革新的な下位文化を支えるのに規模が重要であるということは、都市はつねにこの点に関して有利であることを意味している。村落地域が新しい価値を採用し、それを一般的な規範にしてしまうそのときにおいてさえ、都市ではそれとは異なる価値が生じつつある」(p.1336)。

「つねに革新と変化を育むのが、アーバニズムの性質なのである」(Ibid., p.1336)。

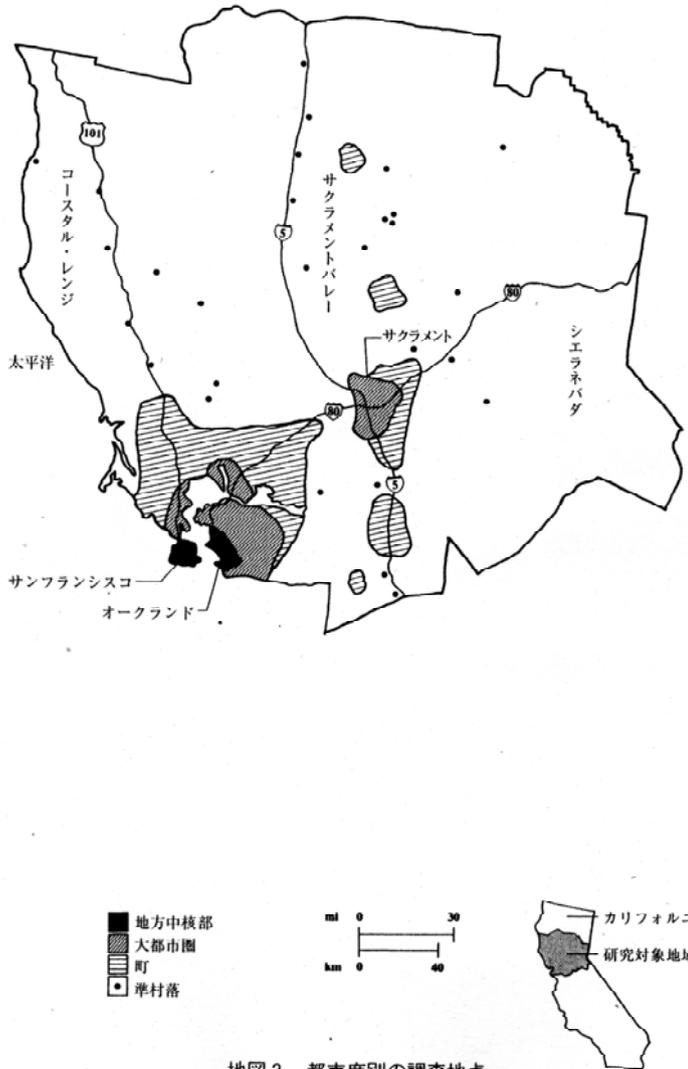
「基本的には、理論的探究の出発点となった問題である都市生活の『非通念性』が説明された。

このモデルでは、ワース流のメカニズムに依拠した説明をしていない。そこには、アー

バニズムが疎外、孤立、非人格性、皮相性、ストレスや緊張、不安、冷酷さなどを生み出すと言明するいかなる命題も存在しない」(Ibid., p.1337)。

(3) 下位文化理論の検証---北カリフォルニア調査 (Fischer 1982)

●フィッシャー自身による下位文化理論の検証。



地図2 都市度別の調査地点

北カリフォルニア地方 (サンフランシスコ、オークランドを含む) の 50 地点を選び、1050 人に面接調査を実施。パーソナル・ネットワークを焦点に、下位文化理論の検証を試みる。

●パーソナル・ネットワークの測定

「町の外に出かけるときに家の世話をしてくれる人—植木に水をやるとか、郵便物を取り出すなど」。

「(回答者が働いている場合) 仕事上の決定について相談した人」。

「過去3ヶ月間に家事を手伝ってくれた人」

「最近、社交的活動でかわりのあった人 (夕食に招待したとか、映画を見に行ったとか)」。

など 10 項目の質問で名前の挙がった人 (各質問 8 名程度)。各人の性別、知り合っ

た方法、とくに親しい人は誰か、などを聞き出す。

「親族」「仕事仲間」「隣人」「同じ組織の成員」「純粋な友人」に分類。居住地の都市度は、ネットワークの選択性を高めるのか？

●都市度別の比較

調査地点を、地方中核部 (regional core)、大都市圏 (metropolitan)、町 (town)、準村落 (semi-rural) に分類。個人特性を調整して、居住地の都市度の効果を検討。

●親族、とくに「拡大親族」結合は、都市度とともに減少。

●隣人結合は都市度とともに減少するが、居住地の異質性と成長度を調整すると、有意差はなくなる。

●友人結合は、制約の少ない人びとのあいだでは、都市度とともに増大する。

「都市度の効果は、なんらかの特定のタイプの人びとについてはよりはっきりと示される。私は、それらの人びととは、人口集中が決定的に重要である相対的に制約のある、あるいは移動しにくい人びとであると考えてきた。しかし、その反対が真実であるようだ。図12は、純粋な友人が低所得の回答者と高所得の回答者で別の結果を生むことを示している。双方の集団のなかで、都市の回答者は小さな町の回答者よりもかなり多くの純粋な友人を挙げていた。しかし、高所得の回答者のなかでのみ、都市度のなんらかの独立した寄与と思われるものがある。低所得の回答者のなかでは、都会人の年齢の若さ、学歴の高さ、未婚であることが完全に友人関係の多さを説明している。似たようなコントラストは、自動車へのアクセスがある人とない人、子どものいない若い大人と子どものいる親、男性と女性、一般に制約のない人びとと移動に重大な障壁がある人びとについても示すことができる。それぞれの対の第1のグループに属する人びとのなかでは、都市度それ自体がより多くの純粋な友人をもつことにわずかに寄与しているようであるが、第2のグループに属する人びとのなかでは、都市度は付随的

Fig. 12.

なものでしかない。要するに、都市生活が効果をもっているように見えるのは、それをどのように解釈しようとも、都市が準備する社会的機会を利用するだけの自由と資源をもつ人びとにとっ

てだけである」(p.116)。

●データは、下位文化理論を部分的に支持しているのみ。

「サイズ、カット、スタイルは良し。しかし、この理論のスーツはまだいくらか直しが必要である」(Fischer 1982, p.230)。

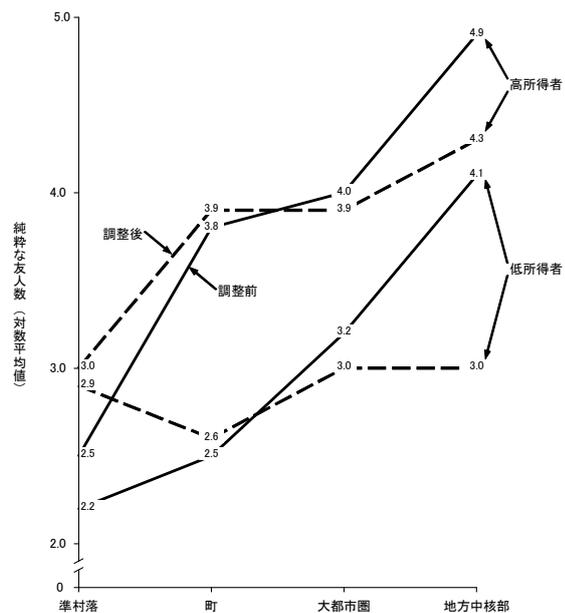


図12. 低所得者と高所得者の都市度別、純粋な友人数